

東京帝國大學
醫科大學教授

醫學博士

永井

潛先生著

(好評再版)

生物學と哲學との境

科學の嶺と、哲學の峰と、聳え峙つ、其間の深い谷底に碧の如き生命の泉が湛て居る。其處に「物」と「心」が神秘の影を映じて居る。「人」と「自然」が樂しき踊を舞つて居る。「主觀」と「客觀」とが温き握手をして最も崇く最も大なる天啓に耳を傾けて居る。而かも科學の嶺に得たる者も、哲學の峰に超然たる者も、到底此天地の大觀に接することは出來ぬ。之に接するの出來るものは嶺より峰に向ふ聖智の人、峰より嶺に進む自覺の士でなければならぬ。曩に「生命論」を公にして洛陽の紙價を貴からしめ「醫學と哲學」を出して斯界を驚嘆せしめたる著者は今や此大觀を捉へて讀者に説明せんと努力して居る。或は生命研究の眞諦を論じ或は智識生活の第一歩を説き、或は兩性相關の妙趣を述べ或は心身影響を叙し或は自然死の研究に入る。材は人を得て其光彩を放ち、人は材を得て其妙腕を揮つて居る。思を自然と人生とに馳せつゝある天下有識の士は此の書を繕いて必ずや莞爾たる者あるであらう。

(五版出版來)

生命論

生命に關する思潮の推移を釋ね、自然科學の見地より之に向ひて最新明瞭の解釋をトせる者、本書を措きて他にありや。曰く「膠質化學と生命」。曰く「原素の循環と空中窒素の利用」。曰く「營養の眞相と食物の人造」。觸媒作用と酸酵素。曰く「實驗遺傳學」と「人種改善學」。曰く「變化性と生物測定學」。曰く「刺戟性と生物の調和」。此等皆相集つて一巻の絢爛たる錦繡を織り出して居る。而して附録とせるシエーフア氏の生命人造論は錦上更に花を加ふ。

菊判總布製天金
箱入純白七百頁
定價參圓八拾錢
送料拾六錢

菊判六百頁天金
布製挿畫五拾枚
定價參圓八拾錢
送料拾六錢

發行所 東京市東區平河町五丁目番四一〇二 洛陽堂 (電話番四二八)

漱石先生と門下

森田草平

私は今昂奮して居る。先生が亡く成られてから殆ど絶間なしに人と應接して居たので、悲しいと云ふことも未だ好く解らない。最初は——こんな事云へば、唐突と滑稽の感を誘致するかも知れないが——雪隠へ這入つた時、漸つと涙が差含まれる位のものであつた。此の一兩日は好く夜半に眼を覺ます。そして耐らなく淋しく成る。晝間は未だ先生のお宅へさへ行けば、何時でも先生に會はれるやうな氣がして居る。こんな慌しい心持で居る時、先生について語るのは何だか悪いやうな氣がしないでもない。が、それにも係らず、『太陽』の依囑に應じて、此處に先生について筆を執らうと決心したのは、先生の亡く成られた九日の夜、私が新聞記者の應接係をして——それも口吃して辯の訥な私が自ら進んで成つた譯ではない、恰度記者諸君の押懸けた時、私が其場に居合せたから押附けられた迄である——記者の間はれるまゝに答へたところ、あゝ云ふ場合に有り勝ちなこととして、私の云はうとしたことが可成多く誤まり傳へられた。私はそれに對して責任を感じない譯に行かない。で、最近の機會に於てそれを是正して置きたいと云ふ欲望が私自身にある。それと最一つは

私自身よりも適當な人が若し誰も書かないならば、そして誰かが書かなければ成らぬとすれば、切めて私が書くこと云ふことがより好い事であらうと信じたからである。先生の一生、若しくは一生の事業について語ることは、私の今の問題ではない。それは今の私には出來ない、出來てもしたくない。私は主として先生と先生の門下生との間の事情について語らうとする。

先生の門下生——と云つて可いか、兎に角先生の門に入つて教へを受けた青年の數多かつたことは當代の異數として差支ないと思ふ。そして、世間では先生のことを文學上の教へを垂れる以外に、好く門弟子の世話をする人、世話好きの人として噂をするやうである。實際、先生は好く世話をした人であつた。が、所謂世話好きの人では斷じてない。寧ろ人の世話は所嫌であつた。所嫌であつたけれども、人が困るのを見ては打捨つて通り過ぎられない人であつた。人の窮を見救ふと云ふことは、自ら犠牲を拂ふことである。自ら犠牲を拂ふことは、先生自身の言葉に従へば、非常に苦痛である。尤も、かう云ふ場合本人の言葉を何處迄信じて可いか解

漱石先生と門下 (森田草平)

らないけれども、兎に角先生はさう言つて居られた。そして、私自身はそれを信じようとして居る。が、犠牲を拂ふことを苦痛に感ずるのは、いよ／＼拂ふまで、拂つて仕舞つてからは直ぐにそれを忘れる人であつた。他人に金を恵んで置いたから、何時迄もそれを記憶して居るやうな人ではなかつた。これは先生の修養からも来て居るやうだが、大部分は持つて生まれた性癖であつたらしい。兎に角、先生は努力なくしてそれを忘れることの出来る人であつた。これを見ても、世俗の所謂世話所好、若しくは親分氣質の人として先生を見る説は撤回して貰ひたい。親分氣質といふものは、自分を扶持して置いて、それを土臺にして自ら利しようとする氣味がある。意識的にはなくとも、少くとも意識下にはある。先生は門下生に依つて何一つ利しられたことはない。

先生の葬式が十二日に済んだ明くる日、一人の雲水が玄關へ訪ねて来た。聞いて見ると、それは七年前に先生が胃腸病に居られる頃一度訪ねて来た青年ださうな。親が破産した揚句、坊主に成れと遺言して死んだ。處が、青年は坊主よりも小説家に成りたい、だから弟子にして呉れと云ふのだ。先生は文學者としての成功の困難を説いて、それよりも親の遺言に従つて、大きな寺へでも這入つて修業したら好からうと云ふので、越前の永平寺まで行くだけの旅費を呉れた。其青年は先生の言葉通りに永平寺へ行つて修業した。修業中は親兄弟と雖も音信をせぬ規定なので、今迄先生へ手紙も差上げ



(影撮の前年五)士居石漱目夏故

方でも、如何してもそれに迎合して行く傾きがある。先生はそれは所嫌であつた。迎合されることが所嫌だけに、先生の方でも若い者の氣に喰はん所はびし／＼遣附けられた。びし／＼頭から遣られながら、矢張先生と話を居る時が一番のんびりした。のんびりして思ふことが十分に言へるので

ある。これが先生の下に多くの學生の集まつた最大の原因であらうと思はれる。先生の著作を讀んで、先生の前へ出て、大抵の人が皆悪く言つた。悪く言はな

なかつた。が、今度長老()の位を受けて、遠州の秋葉山へ變るにつれて、遠州へ来てから始めて先生の御病氣の話を聞いた。で、生前に一度お目に懸かりたいと思つて、早速秋葉山を出發したが、雲水の身では汽車に乗ることも許されて居ない。夜を日に繼いで歩いて来て、今漸つと到着したと云ふのである。先生の靈前で讀經焼香することを許されたいと云つて、お線香と蠟燭とを持つて来て、讀經して歸つた。三十日までは市内の各寺に寝泊りして、毎日來て讀經したいと言つた。そして其言葉の如く、今でも毎日來て居る。

兎に角、先生は好く人の面倒を見た人であつた。そして、死んでからでも、好く人を泣かせる人であつた。此處に擧げたやうな話は未だ他に幾許でもある。が、こんな意味で世話に成らない迄も、會ふ程の者に一種の懐しみを抱かせる人であつた。懐しみを抱かせるだけのゆとりと暖かみのある人であつた。

木曜會——そんな會の名がある譯ではないが、木曜日の會日に先生の書齋へ集まつて來る若い學生と先生との間に、議論風發、各自勝手なことを言ひ合つて、夜の闌くるを知らなかつたのは殆ど毎週のやうであつた。先生は大學は所嫌であつたけれども、學生は所好であつた。そして、若い者にも言ふだけのことは言はせる人であつた。自分の主義主張とか乃至氣分とか傾向とか云ふものに嵌つたことではなければ言はせないのが、通例先輩なるもの、弊である。従つて若い者のければ濟まないやうな氣がして悪く言ふのである。さう云ふ傾向は木曜會の初期、先生の創作に一番油の乗つた時代に於て、最も烈しかった。三十九年の夏、私が先生から頂いた手紙の中にも「昨宵の猫に對する皆の非難は多数決だから仕方がないとして、知己を後世に待つ外ない。今日は春陽堂から督促に會つて暑い最中にうん／＼言ひながら、筆を走らせて居る。これは君の氣に入りさうなものだ。君にでも氣に入らなければ氣に入るものはあるまい。(草枕を書いて居られたのである。漱石虛名を擁して、毎日知己を後世に待つやうでは憫然なり」と云ふやうな意味のことが書いてある。此手紙を讀み返して見ても、其の當時の木曜會の光景が彷彿として眼に泛んで來る。

先生の講演の旨かつたことは遍ねく世人の知るところである。が、座談は一層旨かつた。旨いと云つては失禮かも知れないが、一層盡きない味があるのである。私は學校時代に哲學の初歩を教はつた時、所謂ダイアレクティブク・メソッドと云ふことを學んだ。これは何でも他人と談話を交へ、若しくは自分自身と談話を交へて居る間に、それに依つて眞理を發見する方法だと云ふことである。哲學者が思索すると云ふことは、彼自身と談話を交へたり討論したりすることである。初期の哲學者は大抵此の對話の形式で彼自身の哲學を發表した。プラトンの「對話」など引合ひに出して來ると、先生は好いとしても、私どもが少し豪く成り過ぎるやうで鳴辭がま

の攝理に従つて動いて居るものゝやうに書き表したいと、折に觸れて言つて居られた。そして、左様あらんことを豫期して居られたやうである。

藝術上の問題ばかりでない。先生の坐臥常住にも此用意を怠らなかつたやうだ。最終の木曜日に——即ち十一月十六日の夜——私は或友人と一緒に先生を訪れた。其時友人は近頃自分の友人で或華族の令嬢と結婚したものがあつた。それに対してお祝物を贈らうとするが、先方の家と釣合ふ程の物を贈ることは自分の財政が許さぬ。許しても苦痛である。寧ろ贈ることを止めしやうかと考へたが、それも何だか氣が濟まない。こんな詰らない世俗的の習慣にも、自分は倫理上の苦痛を感じさせられる。それが可厭だと云ふやうな意味のことを言つて居た。それに對して先生は、それは未だ「私」を去ることが出来ないからだ。お祝ひなぞ贈らないで、御馳走にだけ成りに行つて平氣で濟まして居られるやうに成ると可い。自分は他の文士と比較して割合に好い報酬を獲て居るそれは不都合だと言つて答める者があるかも知れない。假にさう云ふ者が出来たとしても、自分は氣に懸けないで居られるつもりだ。同時に又多勢ある娘の一人が自分の前へ出て来てお叩頭をした。不圖顔を擧げたのを見ると、片眼が潰れて居る。それを見ても、自分はあゝ左様かと言つたまゝ、心を動かさずに居られるやうな境地に這入つたとは云はないがさう云ふ境地に這入りたいとは始終心懸けて居ると云ふやう



（次晴管、己作上井、運藤佐、續木々佐、亭佐影りよ左て向）生業卒等優校學工礎
日十三月一十（寅正田前、郎一重田岡）

な意味のことを言つて居られた。私が此話を新聞記者に向つて繰返した時、最後に居残つた或記者は私に反問して曰く、『失禮ですが、此處のお嬢さんでお眼の悪い方は何誰ですか』と。私は驚愕措く所を知らなかつた。そして、飛んだ事を話したものだと思つた。新聞記者諸君に向つてこんな話をしたのは、實際私の粗忽である。併し私は其時自分の心に實際感じて居たことの外に、何事も話すことが出来なかつた。私が自分を二重に使ひ分けて、あの時あの場合新聞記者に向つて話すに應じしやうなことを話すことが出来なかつたのは、偏に宥怨を乞ふ外ない。——私は此處に繰返して置く、先生のお嬢さんに眼の悪い方は一人もない。あれは譬喩である。私は最終の木曜日に、最後まで居残つて先生と話すことが出来たのは、私が一生の幸福と思ふ所である。平生なら頭がらみ／＼遣られるところだが、あの夜は如何した風の吹き廻しか、大變お手和らかで、大いに受けが好かつた。不思議に思つて歸つて来たが、次の木曜日に行つて見ると、先生は急病で一切面會謝絶だと云ふことである。それから十七八日にして、先生は到頭歸らぬ旅に立たれた。私は先生が吐血されたと聞いて、すぐ／＼玄關から引返す時、先生が前の週に大變優しかつたことを想ひ起して、擔ぐ譯ではないが、如何いふものか不吉の感に打たれた。其後も醫者から容態の報告を聞いて、理性の上では多少安心しないでもないが、感情では少しも不安の念が去らなかつた。不意に來る暗示は毎も惡

かつた——こんな事を發表するのは今が始めてだけれども、毎も不吉な暗示にばかり打たれた。そして、私の不安は到頭適中した——
好く訊かれることだが、先生に遺言といふものは全然なかつたやうである。先生が生前の覺悟から云つても、そんな必要はなかつたらしい。病中も醫者から容態を訊かれるたびにそれに應答へをされたのを外にしては、何事も言はれなかつたやうだ。若し先生の存生中最後に言はれた意味のありさうな言葉と云つては、次のやうなものだ——
亡く成られる當日、九日の朝、お子さん方を寢間へ連れて行つた時、先生は末の男の子二人の顔を見て、何にも言はずにに／＼と笑はれたさうな。それから十二に成る末の女の子を連れて行つた時、女の子だけに、先生の囊れた顔を見るや否や、聲を揚げて、わア／＼泣き出した。傍に居た奥さんは、『泣くんぢやない、泣くんぢやない』と言つて止められたさうな。それが先生の耳に通じたのか、先生は弱い聲音で、『最う泣いても可いんだよ』と言はれた相である。これは如何にも先生らしい言葉ではないか。先生らしいと云ふ外に、何とも形容することは出来ない。先生らしい悲しい言葉である。此處に筆を停めて置く。
——十二月十八日夜——